

6 食事

社会人ともなると、仲間内の懇親会から接客まで飲食は欠かせない行為。筆者の経験上、入社10年を過ぎる頃から飲食の付き合いが増えていく。特に食事のマナーが悪いと印象を悪くして信用を失いかねない。食事のマナーは社交上の大切な所作となる。

石毛直道は、「人間の食事はわかちあって食べるもので、一人で食べるものではない。食事は個人的行動ではなくて、社会的行動であるのが原則」（『食事の文明論』中公新書）と述べている。「わかちあう」とは分配のルールに従うということであり、「一人で食べるものではない」とは「共食」を意味している。わかちあい、共に食べるという行為は単に肉体的な欲望を調整するということではなく、心と心を分かち合うことである。それは非競争の原理、即ち精神的な愛着によって結びつく社会的行動であることを意味している。

この社会的行動で、人間は連帯感を深め帰属意識や居場所を確認し、敵対心のないことを表現する。食事のスタイルや作法が同じであれば安心して食事を共にすることが出来る。また、食事は欲望が出てしまう場であり、見せたくない行為を人前に晒さざるを得なくなる。そこで、羞恥心を隠すのが作法である。作法は、共食する相手に不快感を与えないための配慮ともなる。

「食事を円滑に進めるために、食事を共にする者同士の相互干渉を調整するルール」（石毛直道 前掲書）として食事の作法（マナー）が形成されたのであろう。敵対心のないことを表現する社会的行動（社会関係を調整する行為）には、お茶を出す行為やタバコの火を貸す行為などもある。

また、食事の場は公的行事の場であり、小さな宗教儀礼の場でもある。「いただきます」と言って手を合わせるのは、作ってくれた人に対する感謝とともに穀霊に対する感謝を表すことに通じている。食事の場の秩序は神によって見守られているという観念が底流にあることの表われである。

また、地鎮祭や上棟祭といった神事^{なごらい}の後の直会や正月に雑煮（神に供したものを調理した料理）をいただく場は、祖先や神々との共食の場でもある。それは、神々と人々との連帯感を表明している。神々の世界と人間の世界が混淆してこの世が成り立っているという世界観の表われと見ることができる。

これらの小さな宗教儀礼は、社会の最小単位である“家族”の下で営まれてきた。かつては、毎朝仏壇に炊きたての仏飯を供し、その後に家族揃って朝食をとった。仏飯を供するのは子供の役割であり、それは、自分を取り巻く広大無辺の世界があることを意識させ、自分が一人勝手に生きているのではないことを自覚させる無言の教育となっていた。また、長期不在の家族のために、家族と同じものや本人の好物を供える“陰膳”が行われていた。これは、家族の連帯感を表わした行為。

食事のマナーは家族の食事の場を通じて教えられるものであり、単なる作法に止まらず、作法が含意している意味までもが受け継がれていたのである。近年は、核家族化の進展やライフスタイルの変化によって、食事のマナーと意義が希薄化している。家庭で教えられ

ないとしても、社会生活を円滑に行う上で、食事の作法の基本は身につけておきたいものである。